

氏名	河 正一		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博文化甲第18号		
学位授与年月日	平成25年9月20日		
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当		
学位論文題目	フェイス侵害行為としてのインポライトネスの考察		
論文審査委員	委員長	教授	小出 慶一
	委員	教授	仁科 弘之
	委員	准教授	川野 靖子
	委員	教授	武井 和人
	委員	教授	山中 信彦

論文内容の要旨

河正一氏（以下、著者）のこの論文（以下、本論文）は、インポライトとされる行動の分析とともに、言語行動分析のための新たな観点の探求を目的としている。

序章では、ポライトネス研究の問題点とインポライトネス研究の意義、方法、本論文の構成が述べられている。Brown&Levinson(1987)(以下、B&L)のポライトネス理論は、人は相互にフェイスを尊重する協調的行為者であるという前提に立つが、人は相手のフェイスを脅かす行為（Face Threatening Act. 以下、FTA）を意図的にすることもある。このような行動の分析に B&L の前提は適当ではなく、自己の利益追求者としての人という観点を取り入れることによって初めてその行動の意味が捉えうるという仮説が述べられている。

第1章では、ポライトネス、インポライトネスそれぞれについての研究動向が紹介され、本論文が、語用論的な立場からの研究に位置づけられることが述べられている。

第2章では、いわゆる慇懃無礼な行動についての調査、分析が示され、慇懃無礼な行動は、B&L のポライトネス理論では捉えられないことが主張されている。

第3章では、前章に引き続き、慇懃無礼な行動が分析されているが、ここでは敬語がどのような時に慇懃無礼に感じられるかが関連性理論を用いて分析されている。そして、相手との距離を適切に反映しない敬語使用が不快感を与えることが指摘されている。また、このような行動の分析には B&L 理論が適当ではないことが述べられている。

第4章では、B&L のフェイス概念が、FTA の観点から再検討されているが、結論として、人がフェイス無視の行動をするのは、人の生物としての本来的な性質によるものであり、人を常に衝突する可能性のあるものとして捉え直し、その象徴としてフェイスを捉えるべきであると主張されている。そして、FTA の要因として、利益獲得という動機付けが重要

であることが、事例の分析を通して述べられている。

第5章では、前章に挙げられた利益獲得要因の性格が、ドラマ等の依頼場面の分析を通して検討されている。その分析の結果として、依頼行動の戦略は、B&Lの言う依頼内容の文化的負担度によって決まるのではなく、当事者間の利益認識によると考えられ、ここでも、生存本能に基づいて行動するものとしての人というところに言語行動の動機付けを求めるべきではないかという主張がなされている。

第6章は、「失礼」「無礼」という2つの語の意味と機能が分析されている。「失礼」という判断には、当該行動の社会規範抵触認識によるものと、参加者のその場での判断による2つの場合があるが、「無礼」には前者によるものはなく、後者のみであると分析されている。

第7章は、2章から6章の考察をもとに、インポライトネスの基本的な問題が論じられている。まず、インポライトな行動とはどのようなものか。人の対人行動を、フェイスと社会規範という2つの観点から捉えたとき、相手のフェイスは認めるが社会規範に従わないという場合に、インポライトになるとされる。次に、典型的なインポライトネスとはどのようなものか。ここでは、不利益表明、否定的評価表明、自己顕示表明の3つの性質を持つ行動が典型とされる。最後に、人はなぜインポライトな行動をするのか。その理由は、相手からのFTAへの反応、相手への否定的感情の表明などであるが、その背後には、自己の生存にとっての有利な状況の実現という行動原理のあることが述べられている。

終章では、2章から7章の議論がまとめられるとともに、インポライトネス研究が単に言語の問題としてではなく、人の行為全体の中で検討されるべきものであることなど、今後の課題が述べられている。

【目次】

序章

1. 本研究の位置づけと研究目的
2. 本論文の構成

第1章 ポライトネス・インポライトネスの研究動向

1. ポライトネス
2. インポライトネス

第2章 質問紙調査に基づく「慇懃無礼」の意味論と語用論—原型とポライトネスの観点から

1. はじめに
2. 先行研究
3. 質問紙調査
4. 調査結果の分析と考察

5. 慇懃無礼とポライトネス理論
6. まとめ

第3章 関連性理論からみた敬語の過剰使用とその語用論的効果—慇懃無礼を中心に

1. はじめに
2. Sperber & Wilson の関連性理論
3. 過剰な敬語使用とは
4. 慇懃無礼における推論過程
5. 慇懃無礼という言語行動はどのように認識され、レッテルが貼られるか
6. まとめ

第4章 相互作用における言語行動—社会的価値としてのフェイス

1. 目的
2. ポライトネス理論及びインポライトネス理論の問題点
3. 社会的価値としてのフェイス
4. 言語行動の動機づけにおける社会的要因
5. まとめ

第5章 相互作用における利益獲得の言語ストラテジー

1. 目的
2. 依頼表現における言語ストラテジー
3. 利益の分析
4. まとめ

第6章 「失礼」と「無礼」の意味領域

1. 目的
2. 先行研究
3. 機能的観点における失礼の用法
4. 機能的観点における無礼の用法
5. 「失礼」と「無礼」の否定的評価における機能的用法
6. 「失礼」と「無礼」の意味領域
7. まとめ

第7章 インポライトネス—相互作用におけるFTAを中心に

1. 目的
2. 先行研究
3. インポライトネスへのアプローチ
4. インポライトネス
5. FTA のストラテジーとしての現れ
6. 相互作用におけるFTAの選択

7. インポライトネスの動機づけ

8. まとめ

終章

参考文献

本論文に関する既発表論文

付録 1. 学部生の質問紙調査

2. 院生・教員の質問紙調査

論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を2013年8月5日(月)に公開で開催し、著者による発表を踏まえ、質疑を行い、論文内容を審査した。

本論文における特徴的な研究上の方法、結論付けられた新たな知見・見解、また研究現況に与えるであろうインパクトなどを挙げる。

1) テーマ設定の意義とその明示

語用論の領域で現在もっとも影響力のある理論は B&L のポライトネス理論だと思われるが、この理論は、人は相互に相手のフェイスを尊重し、協調的にふるまうものだという前提に立っている。しかし、本論文が指摘するように、人は必ずしも協調的にのみ行動するわけではない。人の言語行動をより包括的に捉えるには、B&L の理論とは別の観点が必要になるはずである。インポライトな行動の分析に必要な概念、理論的枠組みとはどのようなものかという本論文の問題設定は、言語行動をより包括的に捉えるために不可欠のものであると思われる。これまで手つかずだったこの問題に、正面から取り組んだ点で、本論文は大きな意義があるものと言える。

2) 先行研究の理解と引用

B&L の理論について論ずるための文献が広範にわたって参照され、また、引用されている。その分野は、語用論、社会言語学など言語関係のものだけでなく、哲学、社会学、文化人類学などに及んでいる。また、年代的にも必要十分に遡って参照言及がなされている。

3) 使用されたデータと取扱い

本論文の議論を進めるにあたって、慇懃無礼の分析にはアンケート調査が行われているが、データ収集の方法、分析、結果解釈など妥当なものと考えられる。

4) 議論、結論の妥当性と学術的貢献

本論文で得られた結論の中で、注目すべき点は、ポライトネス理論の中心的な概念であるフェイスというものについて、B&L のフェイスとは別のフェイスの存在を示唆した点である。人は、他者と協調的なフェイスとともに、自己の利益獲得のための攻撃的なフェイスをも持つとする視点は、今後さらに検討は必要ではあるが、言語行動の原理を考えると、新たな視点を提供してくれるものと思われる。

また、インポライトな行動の要素として、相手にとっての不利益表明、否定的評価、自己顕示などの特徴を指摘したことは、新しい知見であり、今後のインポライトネス研究において新たな基点ともなるものと思われる。

5) 論文としての体裁

本論文、論文としての構成、用語、図表の示し方、引用や注の付け方、文献表の体裁など、いずれにおいても、日本語の論文として適切な形式を備えている。

本論文の研究姿勢、およびもたらされた結論は、上述の如く高く評価されるべきものであるが、しかし、なお検討されるべき問題、論証の徹底、等が存することも事実である。発表会で委員から出た意見等を集約すると、以下のようになる。

1) フェイス概念の検討の必要性

本論文にとってフェイスという概念は、B&Lの理論同様中心的なものであるが、今後さらに検討が必要だと思われる。一つは、本論文が書かれていくうちにフェイスの捉え方が変化したためとも思われるが、人は二つのフェイスを持つという捉え方でいいのか、B&Lのフェイスとどのような関係にあるのかなど、今後明確にされていく必要がある。

2) プロトタイプ設定の手続き

本論文では、慇懃無礼な行為、インポライトネス行為の2つについて、そのプロトタイプが設定され、議論されている。しかし、そのプロトタイプが設定される手続きは明示されていない。そのため、提示されたプロトタイプが妥当なものかどうかの議論が十分にできない状態になっている。この点は改善される必要がある。

3) プロトタイプとその要素との関係

本論文ではプロトタイプを構成する要素が、プロトタイプそのものとして扱われている箇所があったが、プロトタイプとその要素とは区別されるべきである。また、7章では、インポライトネスの典型を構成する要素が挙げられ、その要素の拡張として「侮辱」「脅迫」などの行為が挙げられているが、これは拡張ではなく事例化とするのが一般的であろう。通常のプロトタイプ理論と異なる用語法を採るならば、その説明が必要であると思われる。

4) 6章の位置づけ

本論文の6章は「失礼」と「無礼」という語の意味・機能分析をしたものであるが、全体との関連が明快ではない。結論にどう寄与しているかが不明なところもある。少なくとも、この章が論文でどのような役割を持っているかが説明されるべきである。

本論文には、これらの問題点があることも事実であるが、総体として見れば、今後、当該研究領域において、大きなインパクトを与える業績として認知されるであろうことが予想される。

以上のことから、本委員会は、本論文が学位論文の要件を満たしており、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。